

ピューリタンの選挙日説教と形式： Danforth, “Errand into the Wilderness”

Ogura Izumi
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1354644>

出版情報：英語英文学論叢. 46, pp.103-122, 1996-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

ピューリタンの選挙日説教と形式

— Danforth, “Errand into the Wilderness” —

小倉いずみ

1987年の *William and Mary Quarterly* の中で、David D. Hall は最近のピューリタン研究の動向を要約している。¹⁾ その中で、Hall は Perry Miller 以後の研究は大きく二つの流れに分かれると述べ、これらを literary historian と seminary historian と呼ぶ。literary historian はピューリタン文学の再評価を始めた人々で、文学作品(主に詩)を通してピューリタンの imagination を理解することを目的としている。ピューリタンは plain style を重んじたと Perry Miller は *New England Mind: The Seventeenth Century* (1939) で述べているが、literary historian はこれに反対の立場を取り、Edward Taylor や Anne Bradstreet の文学的想像力を探求し、ピューリタン文学研究を開拓した。一方 seminary historian は New England Puritanism の特異性を歴史的に研究する学者で、ピューリタニズムの宗教概念や多様化したドクトリンの明確化に貢献した研究者を指す。1960年代や70年代の歴史家の中には Robert Middlekauff や David Levin がおり、ヨーロッパのピューリタニズムとの対比歴史研究では Norman Fiering や Michael McGiffert などが含まれる。こうした歴史研究においては植民地時代の初期に重点が置かれており、説教や日記が文学的解釈の対象としてではなく歴史の事実の把握に役立っている。特に McGiffert は契約神学の解明に優れ、McGiffert の業績なくして covenant of grace や covenant of works を語ることはできない。McGiffert は歴史家であるが、資料の解読は厳格で原典に忠実に分析している。

このようなアメリカの研究動向の中で繰り返し言及される重要な概念は「回心体験」「conversion」と「使命」「errand」である。私たち日本人がピューリタンの文学作品や説教を研究対象とした場合、膨大な未整理の資料と数

1) David Hall, “On Common Ground: The Coherence of American Puritan Studies,” *William and Mary Quarterly*, 3rd Series, Vol. XLIV, No. 2 (April, 1987), pp. 193-299. 特に Chapters II & III, pp. 199-222.

多くのピューリタン指導者の名前へのリストに圧倒されるため、まずピューリタニズムの概念の理解から研究に着手することになる。Norman Fiering は著書 *The Long Argument* (1989) の中で、ピューリタン研究の3つの重要な本を挙げている。²⁾ これらは Perry Miller による *New England Mind: The Seventeenth Century* と *Errand into the Wilderness* (1956), そして Edmund Morgan の *Visible Saints* (1963) である。この3冊の本はアメリカのピューリタニズムを特徴づける「回心」とアメリカの「使命」の出発点の研究書と言われる。本稿はピューリタニズム研究でしばしば言及される Samuel Danforth の有名な説教 “A Brief Recognition of New England’s Errand into the Wilderness” (1670) を分析することにより、ピューリタンの選挙日説教とその形式について考察する。本稿の前半を構成する序章においては、まず選挙日説教の制度の確立時から歴史的背景をたどり、その後植民地時代の説教の模範と言われた選挙日説教の形式を解説する。本稿の後半をなす第1章以降では、説教のテキスト(聖句)、ドクトリン(教説)、ユース(教訓)を個々に分析する。なお第1章、第2章、第3章はそれぞれ説教本文の区分に従っている。

序章 選挙日説教の制度と形式

植民地時代に行われた説教の中で現在印刷された形で残っている最も有名な形式は、Election sermon(選挙日説教)と呼ばれ、年に1度 General Court に選挙された代議員がボストンに集まる時に合わせて行なわれたものである。³⁾ 選挙日説教は1634年の John Cotton の説教から始まり、1884年まで約250年間にわたり行なわれた。1635年と36年の2年間は選挙日説教は行なわれ

2) Norman Fiering, “Preface,” *The Long Argument* (The Univ. of North Carolina Press, 1991), pp. iv-xv.

3) 当時の election sermon がどのように行なわれたかに関しては, “An Introductory Essay,” in A. W. Plumstead ed., *The Wall and the Garden: Selected Massachusetts Election Sermons 1670-1775* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Press, 1968), pp. 3-37; “Introduction,” Ronald A. Bosco ed., *The Puritan Sermon in America, 1630-1750 Vol. 2, Connecticut and Massachusetts Election Sermons* (Delmar, N.Y.: Scholars’ Facsimiles and Reprints, 1978), pp. v-xlvi.

なかったが、Thomas Shepard が1637年と38年に説教を行い、それ以後1660年までの20年間にかなり規則的に行なわれるようになった。1660年以降マサチューセッツ湾植民地では選挙日説教は制度化され、1884年に廃止されるまでに欠けた年はわずかに6年間だけであった。⁴⁾聴衆は17世紀半ばで約120名、18世紀になると約150から175名程度で、約1時間にわたり行なわれた。John Cotton, John Davenport, Thomas Shepard, Increase Mather, Cotton Mather など有名な指導者は一度は Election sermon に登場しており、聖職者にとっても植民地にとっても一大イベントであった。⁵⁾またヨーロッパの宗教界への新世界の宣伝も兼ねており、説教の後は印刷され、イングランド

-
- 4) 1634年の John Cotton 以後1660年までに選挙日説教の行なわれた年は、1637-38, 1641, 1643-46, 1648-49, 1656-59で、かなり不規則であった。しかし制度化されると、選挙日説教の行なわれない年はほとんどなくなり、制度化された1660年から廃止された1884年の間に欠けた年はわずか6年で、1662, 1687-88, 1691, 1752, 1764であった。Cf. Bosco, "Introduction," Vol. 2, pp. vi-vii.

1687-88と1691年に選挙日説教が行なわれなかった理由は、マサチューセッツ湾植民地の勅許状が英国国王により無効とされたためである。1684年に勅許状が無効とされて国王から Edward Randolph が総督に任命された。これに抗議して Edmund Andros 総督の時に選挙日説教は行なわれなくなった。1691年に William and Mary により新しい勅許状が公布され、国王による総督の任命制度は残されたが、総督に助言する councilors は House of Representatives から選挙できることになり、選挙日説教は復活した。そして選挙日説教は5月の最後の水曜日と指定された。Cf. A. W. Plumstead, "An Introductory Essay," in *The Wall and the Garden*, p. 9; Emory Elliott, "The Jeremiad," in Sacvan Bercovitch ed., *Cambridge History of American Literature, Volume One: 1590-1820* (N.Y.: Cambridge Univ. Press, 1994), pp. 257-258.

- 5) Mather 家3代が数の上で最も多く、Richard Mather は3回(1644, 1660, 1664), Increase Mather は4回(1677, 1693, 1699, 1702), Cotton Mather は4回(1689, 1690, 1696, 1700) 説教を行なっている。Cf. Bosco, "Introduction," p. xviii. 選挙日説教者に選ばれることは大変名誉なことであった上に、年に1度しか機会がないため、人選は政治的な意味も持っていた。1644年に assistants と deputies の2院制となった後、人選争いが激化した。1645年から1691年までの間、説教者は、(1) 総督と magistrates (assistants と呼ばれる。Council を構成する) (2) deputies (タウンの代表で、General Court を構成する。後に新しい勅許状により House of Representatives と改称) の2つの機関が推薦する者から交互に選ばれた。1691年の勅許状の発効以後この慣習は規定となり、継続された。また説教者は通常自分がどちらの機関から推薦されたかを明らかにした。

を訪問する指導者は冊子を cigar 代わりに差し出したと言われる。⁶⁾

Samuel Danforth の “Errand into the Wilderness” は1670年の選挙日説教である。Perry Miller は Danforth が初めて “errand into the wilderness” という言葉を使用したと述べているが、⁷⁾これはその3年前に行なわれた Jonathan Mitchell の “Nehemiah on the Wall” (1667; p. 1671) の中でも使用されている。しかし Danforth の説教を聞いて Mitchell が印刷の時にこの有名な語句を挿入したとも言われ、定かではない。この説教には2つの重要な語句が登場する。一つは「使命」であり、もう一つは「荒野」である。Perry Miller は Danforth の説教と同じ題名の研究論文の中で、“errand”の意味に注目して分析しているが、Danforth の説教の主題は “wilderness” にあるのではなく、“errand” であると述べている。Danforth は「人々が忘れつつある」ピューリタンの新世界における errand (任務) を思い起こさせようと試みるのである。神から与えられた任務を人々の心の中に復活させようと Danforth は様々なレトリックと多角的な提示法を採用している。この説教は主題が明確なことと相まって、1660年以後の「エレミアの嘆き」と呼ばれる信仰衰退を憂える Jeremiad sermon の代表的説教と言われている。

1670年前後の選挙日説教の主題は大きく分けて二種類ある。⁸⁾一つは政治に関する主題である。これは、タウンの代表にせよ牧師にせよ、良い指導者としての役割や、自由の意味、政府の形態について述べた説教で、William Hubbard の *Happiness of a People In the Wisdome of their Rulers* (1676) や Jonathan Mitchell の *Nehemiah on the Wall in Troublesom Times* (1667) はその代表的な例である。⁹⁾もう一つの説教は errand sermon と呼ば

6) Cf. A. W. Plumstead, “An Introductory Essay,” in *The Wall and the Garden*, p. 18. また Samuel Sewall は1684年に無効とされたマサチューセッツ植民地の勅許状の交付をめぐる英国本国との交渉を行なった Increase Mather に同行し, election sermon を植民地の知性を示す証拠として、選挙日説教の冊子を配布した。Cf. Bosco, “Introduction,” pp. xxiv.

7) Perry Miller, “Errand into the Wilderness,” in *Errand into the Wilderness* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1956), p. 2.

8) Bosco は主題を4つに分けている。第1に宗教と社会の関係、第2に Jeremiad, 第3にニューイングランドとイスラエルの対比、第4に指導者の理想像である。Cf. Bosco, “Introduction,” pp. xxv.

9) William Hubbard, *The Happiness of a People In the Wisdome of their Rulers* (1676), pp. 1-63. Jonathan Mitchell, *Nehemiah on the Wall in Troublesom*

れる説教で、ニューイングランドの使命を思い起こさせることを目的とする。Danforthの「荒野への使命」は1660年代から流行する「エレミアの嘆き」Jeremiadの一つと考えられているが、厳格には聖書のJeremiah（エレミア書）よりもむしろHosea（ホセア書）の主題に近く、ニューイングランドと神との論争の形を取り、人々に悔い改めを促すことが目的である。英国とニューイングランドの説教には一つの流れがあり、平穏な時はJonah（ヨナ書）、信仰が揺らぐときはホセア書、終末論が流行する時はエレミア書が使用されると言われる。¹⁰ヨナ書は神の慈悲を扱う書であるが、試練が3日間と短く、牧師の役割が軽くなるため、長期にわたり説教のパラダイムになることはなかった。ホセア書は批評家のMcGiffertが鋭い分析をしている説教の主題で、イングランドにおいて1600年代に神学者John Downnameが広く応用した。Michael Wigglesworthの詩にみられるように、「神とニューイングランドとの論争」はジェレマイアドの作品とよく言われるが、主題はホセア書に分類される。ホセア書は3日間で救済されるヨナ書よりも主題が暗く神との論争の期間が長い、エレミア書やアモス書の内容よりも人々に希望を与えるとされている。最も絶望が強調されるエレミア書はアメリカへのGreat Migrationが始まる直前の1620年代に英国で流行した説教の主題で、ホセア書のように神が人々を訓戒する書ではなく、悲嘆と暗い破滅を予言する書である。

説教の中で使用された重要な単語“wilderness”はアメリカ文学の大きな主題である。ピューリタンの考えた自然や「荒野」は固定化された腐敗した宮廷から出て、本来の簡素さを取り戻す場所であった。荒野は後に19世紀ロマン主義に至るまで、様々に描写されているが、ピューリタンにとって荒野は無法の土地、又はwild lust（欲望）が野放しになる場所として恐れられた。Danforthのerrand sermonの主題はcourtly pomp（華美）やworldly court（世俗）から離れ、簡素で純粋な信仰心や使命感を取り戻すことにある。説教

Times (lectured in 1667 and printed in 1671), pp. 1-34. これらの説教の出典は、*Election Day Sermons: Massachusetts*, in Sacvan Bercovitch ed., *A Library of American Puritan Writings, The Seventeenth Century*, Vol. 1 (AMS Press, Inc., 1983). ジョナサン・ミッチェルの『城壁に立つネヘミア』はJeremiadの主題としても有名な説教である。

10) Michael McGiffert, “God’s Controversy with Jacobean England,” *American Historical Review*, Vol. 88, No. 5 (December, 1983), pp. 1151-1174.

の中心的予言者として Danforth は John the Baptist に言及し, wilderness における衣服を “rough garments” と “silken and soft raiment” に区別して, 華美な衣服の無用さを説教する。

ピューリタンはまた wilderness を変貌させることを使命とした。これが題名のもう一つの重要な単語 “errand” である。wild lust に満ちた荒野にピューリタンの order, beauty, harmony, knowledge をもたらし, “garden” へ, そして “city on a hill” へと変貌させることは彼らの「使命」であった。Perry Miller は論文の中で, 神の命令を実行する神の “an errand boy” (使者) としてのアメリカの歴史的使命について述べているが, Danforth の説教のねらいは単なる信仰の復活にとどまらなかった。ピューリタンはアメリカの建国は自らの物質的利益を追求する “actual business” (自分が主体者として自分のために働く仕事) ではなく, 聖書に基づく国家の建設 (Bible Commonwealth) という神聖な事業ととらえていた。

ピューリタンの選挙日説教にはその内容の展開の仕方に形式がある。まず第1部で Text と呼ばれる聖書からの引用(長くても10行程度)とその解説である Explication がなされる。第2部で Doctrine が述べられ, 第3部に Reasons (これはドクトリンの中に組み入れられることもある) があり, 最後に Uses と呼ばれる部分で終わる。¹¹⁾

最初の Text は説教の introduction を構成し, 引用された聖書の文の細かい言葉の解説や歴史的背景などを説明する。第2の Doctrine はほとんどの場合イタリック体で書かれ, 説教の主題が明確に提示される。このイタリック体の部分が第3の Reason (Branch) と呼ばれる細部で展開され, 主題が様々な観点から検討される。第4の Use は Doctrine を現在に応用し, その時代の問題点と照らし合わせて, 解答を提示する。Danforth の errand sermon はこの Uses の部分で dialogism (問答形式) を採用し, 極めて独創的なものとなっている。Doctrine を細かく分析することに独創的である牧師もいるが, 大

11) Teresa Toulouse は Reason を外し, 説教の4部分を text, explication, doctrine, application (use) としている。Cf. Teresa Toulouse, *The Art of Prophesying: New England Sermons and the Shaping of Belief* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1987). Emory Elliott は説教の形式をさらに単純化して3部分として, explication (text から始まる), doctrine (proposition と reason を含む), application (uses を含む) としている。Cf. Emory Elliott, “The Jeremiad,” p. 258.

半の説教者は Uses に論点を置いている。Uses はその時代の背景において聖書の趣旨を展開するという重要な機能を持つため、Application とともに Proposition と呼ばれる。しかし形式上の区分は明確でなく、また区分自体が重要性を持つわけではない。¹²⁾ 選挙日説教の主眼点は結論部分である use(application) に向けて論旨を展開してゆくことにある。この展開のプロセスを破壊し、各部分が相関関係を持たない説教はほとんどない。

選挙日説教は儀式的かつ形式的な要素が強いが、植民地時代の宗教の頂点に立つ説教であり、人々に回心を促す手段という目的も備えていた。後に Jonathan Edwards が行なった Enfield sermon の “Sinners in the Hands of an Angry God” (1741) ほど過激ではないにしても、人々の信仰心を新たにするために説教の文章構造にも様々なテクニクやレトリックが使用されている。¹³⁾ Thomas Hooker は回心体験への準備段階を細かく解説したが、レトリックの他にも emptying, purging, isolating, filling など様々な動作イメージを採用している。また Thomas Shepard も大変 dramatic で moving な説教者として有名である。Danforth の説教は、終結部が Richard Bernard

12) Teresa Toulouse は牧師により説教のタイプが異なることを指摘している。説教の論理の流れに従わず、自由に内容を変化させた牧師として John Cotton をあげている。Toulouse, *The Art of Prophesying*, p. 28. また Michael Ditmore は多くの牧師が説教をダイナミックに行い、福音を目的としたのに対し、Cotton は静的で、聖書の細かい注釈が中心であったと述べている。Michael G. Ditmore, “Preparation and Confession: Reconsidering Edmund S. Morgan’s *Visible Saints*,” *The New England Quarterly* 67 (June, 1994), pp. 309-310.

13) Alan D. Hodder は Richard Bernard と Thomas Hooker の説教を例に取り、ピューリタンの説教で用いられたテクニクを分析している。それらを箇条書きにすると以下ようになる。

Richard Bernard が使用した説教の 8 つのテクニク

- 1) exclamation (感嘆)
- 2) interrogation (審問)
- 3) compellation (呼掛け)
- 4) obsecration (嘆願法)
- 5) optation (祈願)
- 6) prosopopoeia (擬人法)
- 7) apostrophe (頓呼法)
- 8) sermocinatio (会話)

Thomas Hooker が使用した 6 つの文章構成上のテクニク

- 1) anaphora (首句反復法)
- 2) antistrophe (逆反復)
- 3) chiasmus (交錯配列法)
- 4) gradation (段階)
- 5) alliteration (頭韻) and assonance (類韻)
- 6) simile (直喩), metaphor (隠喩), metonymy (換喩), conceit (奇想)

Cf. Alan D. Hodder, “In the Glasse of God’s Word: Hooker’s Pulpit Rhetoric and the Theater of Conversion,” *The New England Quarterly* 66-1 (March, 1993), pp. 67-109.

の挙げたテクニックの *sermocinatio* (会話) の形式を取り、これは *dialogism* とも *communication* とも呼ばれる。悲観的になっている *sinner* が質問や意見を出し、*minister* がそれに答える。説教を文面で読むとインパクトは弱まるが、実際の説教では演説法で言う *enunciation* にあたり、通常の発声である *utterance* と区別される。Danforth は *dialog* を声の調子を変えて *dramatize* したと考えられる。従ってピューリタンの説教は内容やレトリックだけでなく、演説の *delivery* の仕方も重要な要素を占めていた。

I. Text (聖句)

Danforth の “A Brief Recognition of New England’s Errand into the Wilderness” の本文を検討しよう。Text はマタイ書からの引用である。

What went ye out into the wilderness to see? A reed shaken with the wind?

But what went ye out for to see? A man clothed in soft raiment? Behold, they that wear soft clothing are in kings’ houses.

But what went ye out for to see? A prophet? Yea, I say unto you, and more than a prophet” (Matt. 11. 7-9). (p. 57)¹⁴⁾ .

「あなたは何を見に荒野に出てきたのか。風に揺らぐ葦を見に来たのか。では何を見に来たのか。柔らかい着物をまとった人か。柔らかい衣服をまとった人ならば王の家にいる。… 予言者を見るためか。その通り。予言者以上の存在である。」と、この引用は疑問を投げかけ、解答を与える形式を取っている。この引用の *explication* も同様に *dialogism* の形式を取り、Danforth は 4 つの質問と 4 つの解答を準備する。さて引用文の最初の部分に注目しよう。最初の文章は “What went ye out to see?” となっており、“What went ye out to hear?” ではない。Danforth は人々がヨハネの予言を「聞き」に荒野へ出て行ったのではなく、ヨハネという「見せ物を見に」行っているにすぎ

14) Samuel Danforth, “A Brief Recognition of New England’s Errand into the Wilderness,” in A. W. Plumstead ed., *The Wall and the Garden*. 以下の Danforth の説教からの引用は出典ページを括弧の中に入れて示す。

ないと警告する。

こうした基本的な質問の後、Danforthは第1の問い、「人々は“A reed shaken with the wind”（風に揺らぐ葦）を見に出かけたのか」と問う。風に揺らぐ葦とは、軽薄な信仰しか持たず、平穏な時には真直ぐに立ち、「真理、真理」と叫ぶのだが、風が吹き始めるやいなや、揺れて、たわみ、しない、流れに身をまかせる人を言う。“A reed when the season is calm lifts up itself and stands upright, but no sooner doth the wind blow upon it but it shakes and trembles, bends and bows down, and then gets up again; and again it yields and bows and then lifts up itself again.” (pp. 58-59) 風がおさまると、再び勢力を張ろうとする葦のような人々をDanforthは批判するのである。

再び「あなたは何を見に出かけたのか」の質問がなされた後、Textの第2の問いは「“A man clothed in soft raiment?”（柔らかい衣服をまとった人）を見に行くのか」である。この問いに対し、華奢な高価な絹の衣服は宮廷にふさわしくはあっても、荒野においては役に立たないものとDanforthは返答する。“Delicate and costly apparel is to be expected in princes' courts and not in wild woods and forests.” (p. 59)

「それならば“a prophet”を見るためか」が第3の質問であり、その答えは「その通り。ヨハネを見るためである。」である。さらに第4にこの答えを強調するために、Danforthはそれ以上の意味を見出そうとする。“Yea, I say unto you, and more than a prophet”と引用を加えて、予言者ヨハネを超越する存在を暗示する。“All the prophets foretold Christ's coming, his sufferings and glory, but the Baptist was his harbinger and forerunner that bare the sword before him, proclaimed his presence, and made room for him in the hearts of the people.” (p. 60) ヨハネは「先駆け」と呼ばれ、ヨハネの後に到来する偉大なるキリストの存在が暗示される。この存在は第2部 Doctrineの中で明らかにされる。このようにTextの一つ一つの文章に explication を行ない、Textとされた全文を忠実に分析しつつ、4つの問いと解答を提示し、主題にバリエーションを加えるのである。

II. Doctrine (教説)

第2部の Doctrine はイタリック体の文章から始まる。通常は Doctrine が

提示された後、直接 Reason に入るが、Danforth はこの引用部分を前半の Branch I と後半の Branch II の二つに分けて検討している。その前半部分である Branch I を見てみよう。

Doctrine. Such as have sometime left their pleasant cities and habitations to enjoy the pure worship of God in a wilderness are apt in time to abate and cool in their affection thereunto; . . . (p. 61)

「かつては純粋な心を持ち、神を礼拝しようとして快適な都市や住居を棄て荒野に赴いた人々であっても、時がたつにつれて、その思いも弱まり冷めてしまう。」 Branch I において、Danforth は人々が荒野に赴いた理由を再確認する。「どのような目的のためにイスラエルの子たちはエジプトの町や家を捨てて荒野へ出て行ったのであろうか」(*Ibid.*)という質問に、荒野に出た理由は「主のために祭りをし」「hold a feast to the Lord,」「彼らの父なる神に犠牲をささげる」「sacrifice to the God of their fathers」(*Ibid.*) ためではなかったのかと答えるのである。人々はいつのか自分たちの使命を忘れてしまう。それはちょうど人々が見せ物(ヨハネ)を見るために芝居小屋に押しかけるのに似て、激情はやがて時が経つにつれ静まってゆく。

自らの使命を忘れ、人々がヨハネから離れた理由は次の Reason 1 に示される。

Reason 1. Because the affection of many to the ministry of the Gospel and the pure worship of God is built upon temporary and transitory grounds, as the novelty and strangeness of the matter, the rareness and excellency of ministerial gifts, the voice of the people, the countenance of great men, and the hope of worldly advantage. (p. 62)

人々の気持ちは物の目新しさや人々の評判、世俗的な利益に対する期待などの「一時的で移ろいやすい基盤」の上にあったためだと言う。そして Reason 2 においては、福音伝道者に対して人々は偏見や侮蔑を持つ傾向があり、人間の持つ強情で頑な心は神の知恵、慈しみ、勧告をはねのけてしまうと Danforth は言う。

Reason 2. Because prejudices and offenses are apt to arise in the hearts of many against the faithful dispensers of the Gospel. . . . Thus doth the frowardness and stubbornness of man resist and oppose the wisdom and goodness of God who useth various ways and instruments to compass poor sinners; but they through their folly and perverseness, frustrate, diannul, and abrogate the counsel of God against themselves. (p. 63)

神は様々な方法や手段を使い哀れな罪人を引き寄せようとするが、人々は強情にも神の英知を払い除けてしまう。DanforthはDoctrineのBranch Iにおいて本来のerrandを思い起させ、使命が人間の移り気により忘れ去られたと述べて、Doctrineの後半部分であるBranch IIへ導入する。

Doctrineの結論部分であるBranch IIでは、イタリック体の文章の中にDanforthの答えが挿入されており、Branch IIはReasonの役割をそのままの形で果たしているため、Branch IIにはBranch Iにみられるような細かい項目としてReason 1, 2は加えられていない。またBranch IIにおいては第1部Textからのパリエーションの総まとめがされている。

but then the Lord calls upon them seriously and thoroughly to examine themselves, what it was that drew them into the wilderness, and to consider that it was not the expectation of ludicrous levity nor of courtly pomp and delicacy, but of the free and clear dispensation of the Gospel and kingdom of God. (p. 61)

「人々が荒野に出てきたのは何のためだったのか。それは馬鹿げた軽薄さや宮廷風の豪華さを見るためではなく、福音と神の王国がはっきりと広まり確立するのを見るためであったと神は思い起こさせるのだ。」と言う。そして再び「何を見るために荒野に出てきたのか」と問う。「風に揺らぐ葦」を見るためか、「宮廷人」を見るためか、あるいは「預言者」を見るためであったのかと尋ねる。

“What went ye out into the wilderness to see?” Yea in particular he enquires whether it were to see a man that was like to “a reed shaken with the wind,” or whether it were to see “a man clothed like a

courtier,” or whether it were to see a “prophet,” and then determines the question, concluding that it was to see a great and excellent prophet and that had not they seen rare and admirable things in him they would never have gone out into the wilderness unto him. (p. 64)

人々が荒野に出た理由は、「偉大な優れた予言者を見るためだったのであり、もし人々がその予言者に比類なき賞賛すべきものを見なかったとすれば、人々はあえてその人のために荒野に出ては行かなかったであろう。」と Danforth は繰り返し強調する。また荒野に出ることにより、人々は神の恩恵を思い起こし、それを請い求めるようになると Danforth は言う。“the chief remedy which he prescribes for the prevention and healing of their apostasy is their calling to remembrance God’s great and signal love in manifesting himself to them in the wilderness.” (p. 64) このように第2部の Doctrine は、第1部の Text で提起された荒野へ赴く理由をイタリック体の文章の中に要約し、さらに詳細に解説している。そして神の恩恵の強さと永続性を強調しつつ、それとは対照的な人間の些末さや無常を述べている。

III. Uses (教訓)

説教の第3部の Uses において、Doctrine が現在の状況に対して応用される。Uses は2つの部分から成る。Use I は信仰の衰退の原因を探り、Use II は会話問答形式を使用して宗教上の問題点を解明しようとする。Use I において、Danforth は General Court に集合した人々に我々は我々に託された荒野への使命を忘れていないかと問いかける。

Use I. Of solemn and serious enquiry to us all in this general assembly is whether we have not in a great measure forgotten our errand into the wilderness. (p. 65)

そして祖国を棄てて大海を渡り、風吹く荒野に赴いた理由は、純粋な心で神を信仰する自由を手に入れるためであったと言う。

the cause of your leaving your country, kindred, and fathers’ houses and

transporting yourselves with your wives, little ones, and substance over the vast ocean into this waste and howling wilderness, was your liberty to walk in the faith of the Gospel with all good conscience according to the order of the Gospel, and your enjoyment of the pure worship of God (p. 65)

「何を見るために荒野に出てきたのか」という問いかけは、我々がこの任務を疎んじ、任務に背を向け始めている兆候を示すものであった。Danforthは昔の良き日々を回想する。私的な集会や公の会議、教会会議において、いかに我々は聖書を学び、キリストが定めた秩序を探し求めて聖書を対照しながら読んできたことであろう。“What searching of the holy Scriptures, what collations among your leaders, both in their private meetings and public councils and synods, to find out the order which Christ hath constituted and established in his house?” (p. 67) そして子供たちの教育にも宗教を広める努力がなされ、我々は神の訓戒により彼らを育て、無法や放蕩を戒め、素直な気持ちを持って父祖の神に仕えるよう教えてきたとDanforthは言う。“What holy endeavors were there in those days to propagate religion to your children and posterity, training them up in the nurture and admonition of the Lord, keeping them under the awe of government, restraining their enormities and extravagancies. . . .” (p. 67)

このような過去の栄光にひきかえ、現在の状態はどうであろうか。無に等しいではないか、とDanforthは反省を促す。不注意で怠慢な、死んだような魂の状態がひそかに我々を捕らえたのではないだろうか。“Doth not a careless, remiss, flat, dry, cold, dead frame of spirit grow in upon us secretly, strongly, prodigiously?” (p. 68) 教会では芳しい香りは悪臭となり、帯には裂け目がつき、暖かい衣服は荒布となり、美しい顔は焼き印された顔となっているのである。

かつての思いが衰退した理由は何であろう、とDanforthはUse Iの結論へと入って行く。“What is the cause of our decays and languishings? Is it because the Spirit of the Lord is straitened and limited in the dispensers of the Gospel and hence our joys and comforts are lessened and shortened?” (p. 69) 神の聖霊の力が不足し、我々の喜びや慰めが減じたのであろうか。しかし原因は神にあるのではなく、我々の心の中にあるとDanforthは

説教する。人間は心が狭く、神の恩恵を受け入れることができないのである。信仰が冷めて、色褪せた理由は神の側にあるのではなく、我々の不信仰であり、我々の度を越えた世俗的な関心、法外な欲望、邪悪な思いや妄想にあると述べる。

“But though unbelief be the principal yet it is not the sole cause of our decays and languishings; inordinate worldly cares, predominant lusts, and malignant passions and distempers stifle and choke the Word and quench our affections to the kingdom of God.” (p. 70)

この Use I において、Danforth はいわゆる Jeremiad と呼ばれる信仰の衰退を憂えるのである。Use I では pollution, uncleanness, decay, languishing などの Jeremiad sermon に典型的にあらわれる言葉が頻繁に使用されている。

Use I は歴史的背景や使命、信仰の衰退が Doctrine を解説しつつ現代に応用される形式を取っているのに対して、Use II は Danforth が最も独創性を発揮している部分である。Use I では説教者として聴衆から一步下がり detach した形で解説しているのに対し、Use II では dialogism の形式で聴衆と牧師が一体となり、交互のやり取りにより成立する。自分の声で質問を投げかけるかと思うと、キリストの代弁者 (mouthpiece) として答える。説教によく見られる推論解説 (discursive narrative) で説教を終わらせずに、最後の部分で劇的な構成を取り、多くの問いかけを使って今まで扱ってきた主題を多角的に処理している。

Use II には10個の問答 (dialogism) が用意されている。cynic (悲観的な見方をする人) が質問または敗北者の意見を出し、牧師がこれに答える形式を取っている。しかし10個の問答は一樣ではなく、質問の形式が前半の3つを占め、次に間奏のように歴史の回顧が入る。そして残りの6つの問答は Danforth が意見を述べる答えの部分に強調点が置かれている。説教の最後の部分に至って会衆はすでに Danforth が展開してきた論理を熟知しているので、Use II においては presentation の仕方が重要になっている。短い質問が出たかと思うと、すぐに応答があり、二人があたかも会話するがごとくなされるので、dialogism は communication とも呼ばれる。

Use II の最初の部分で、Danforth は再び我々に「荒野への使命」を思い起こすように言う。我々は「風に揺らぐ葦」となってはならない。「真理を唱

え、実践するにあたり、志を貫き、節を曲げることなく節操ある堅実不屈なキリスト者」でなくてはならないと言う。

Then let not us be reeds—light, empty, vain, hollow-hearted professors, shaken with every wind of temptation—but solid, serious, and sober Christians, constant and steadfast in the profession and practice of the truth. . . . (p. 71) (emphases added)

短い文章の中に [s] [k] [p] の発音を集め、典型的な alliteration (頭韻) を踏んだ力強い英文である。Use II の dialogism に入る前に、Danforth は理想的な「確固たる堅実かつ不屈のキリスト者」を提示する。

最初の Question は「意見や判断が分かれすぎていて、我々は何を信じたら良いのかわからない」である。“[Question 1]¹⁵⁾ Alas there is such variety and diversity of opinions and judgments that we know not what to believe.” (p. 72) これに対し Danforth は、キリストについて今と同じくらい様々な意見があった、しかしそれらは偽物であり、「色がついた葉」のように本物の葉の引き立て役にすぎない、我々は真理のみを識別しなくてはならない、と答える。“The various heterodox opinions of the people serve as a foil or tintured leaf to set off the luster and beauty of the orthodox and apostolical faith.” (p. 72)

Question 2 は荒野への使命を再確認し、courtly pomp (宮廷風の華美) や gallantry (洒落) は荒野に似合わないと言う。

[Question 2] But to what purpose came we into the wilderness and what expectation drew us hither? The affectation of courtly pomp and gallantry is very unsuitable in a wilderness. . . . How much more intolerable and abominable is excess of this kind in a wilderness, where we are so far removed from the riches and honors of princes' courts? (p. 72)

15) これ以下の dialog から引用には [Question], [Interlude], [Opinion] に加えて番号が付してあるが、これは分析する際に便宜上つけたものであり、原文にはない。また原文は質問は短く 1～2 行で書かれ、答えの部分は 1 パラグラフの長さがある。

さらに Question 3 で荒野に出てきた目的を問い、神の王国と福音を広めるといふ Doctrine の Branch II が繰り返される。“[Question 3] To what purpose then came we into the wilderness and what expectation drew us hither? Was it not the expectation of the pure and faithful dispensation of the Gospel and kingdom of God?” (p. 73) この Question 3 の中では、ニューイングランドと他の植民地を区別するものは何かという問いが出され、それは忠実な予言者による伝道と神の命令の成就であると Danforth は答える。“What is it that distinguisheth New England from other colonies and plantations in America? Not our transportation over the Atlantic Ocean, but the ministry of God’s faithful prophets and the fruition of his holy ordinances.” (p. 73)

次のパラグラフから dialog の論調が変化し、その転換点として、Danforth は errand sermon の主題に使用される自然災害と植民地を設立した父祖の死に言及する。

[Interlude 4] In removing such faithful shepherds from their flocks and breaking down our defended cities, iron pillars, and brazen walls? Seemeth it a small thing unto us that so many of God’s prophets . . . are taken from us in so short a time? Is it not a sign that God is making a way for his wrath when he removes his chosen out of the gap? (p. 74)

Jeremiad に神の悲嘆と失望の兆候として言及される第一世代の死は1660年代に集中しており、Jonathan Mitchell(1668)、Richard Mather(1669)、John Davenport(1670)などが死亡している。そして彼らの死は神が奈落(墮落したニューイングランド)から愛する者(第一世代の指導者)を救い出すことにより、怒りを示しているのではないか、と問うのである。

このように論調が変化した後には cynic な信者が opinion を述べ、牧師が答える形式になる。「我々は弱く、力なき者」と悲観的な信者に、キリストの力は萎えた手をも回復すると答える。“[Opinion 5] ‘Alas we are feeble and impotent; our hands are withered and our strength dried up.’ . . . The almighty power of Christ accompanying his command enabled the man to stretch forth his withered hand and in stretching it forth, restored it whole like as the other.” (p. 75) そして [Opinion 6] においては、我々の傷は癒

しがたく深手を負っているという信者に、キリストが治せぬ傷はない、いかなる傷も絶望するに及ばない、と勇気づけるのである。“[Opinion 6] ‘But alas, our bruise is incurable and our wound grievous; there is none to repair the breach, there is no healing medicine.’ . . . No case is to be accounted desperate or incurable which Christ takes in hand.” (p. 75) さらに人々はキリストの治癒の手段に偏見を抱いているという信者の意見に対し、人間は神と張り合ってはならないと Danforth は答える。“[Opinion 7] ‘But alas, our hearts are sadly prejudiced against the means and instruments by which we might expect that Christ should cure and heal us.’” (p. 75)

残りの3つの opinion を使って Danforth は強く神の王国を求めよと言う。我々の生きる時代は困難と危険が満ち、海は荒れている (Opinion 8)。パンもなく (Opinion 9)、敵も多く、陰謀によりいつ不意打ちされるかわからないと cynic は言う (Opinion 10)。これに対して Danforth は、キリストに従う者は水の上を歩くことも可能となり、パンはなくとも神の国を求める者にはすべてのものが追随すると述べる。最後に、主に従えば敵はうろたえ、恐怖に襲われると述べて、変わらぬ信仰心を人々に訴えるのである。

“[Opinion 8] But alas, the times are difficult and perilous; the wind is stormy and the sea tempestuous; the vessel heaves and sets and tumbles up and down in the rough and boisterous waters and is in danger to be swallowed up.” . . . Yea he can enable his people to tread and walk upon the waters. To sail and swim in the waters is an easy matter, but to walk upon the waters as upon a pavement is an act of wonder. (p. 76)

“[Opinion 9] But what shall we do for bread? The increase of the field and the labor of the husbandman fails.” . . . Attend we our errand upon which Christ sent us into the wilderness and he will provide bread for us. (p. 77)

“[Opinion 10] But we have many adversaries and they have their subtle machination and contrivances, and how soon we may be surprised we know not.” . . . If the people cleave to the Lord, to his prophets, and to his ordinances, it will strike such a fear into the hearts

of enemies that they will be at their wits' ends and not know what to do. (pp. 76-77)

Danforth の “A Brief Recognition of New England’s Errand into the Wilderness” は人々の信仰を回復しようとする主題を持つ説教である。Jeremiad sermon の中でも運命や最後の審判などの暗い破滅を提示することがなく、極めて静的に知的に、歴史におけるニューイングランドの使命を解説している。そして構成は重厚で、Text の主題である “errand into the wilderness” が各部分の Doctrine や Uses に必ず引用され、強化されてゆく。その都度、様々な光が多方面から主題に照射され、いわば暗やみの中にある説教の主題が徐々に浮かび上がるのである。こうしたバリエーションの加え方は sentence pattern にも表れ、一つの文章の中においても parallel construction が多用されて意味を積み上げている。さらに最後の Use に至って、大命題の “errand into the wilderness” がアメリカ史におけるピューリタンの移住に結びつけられている。ピューリタンの説教は、例えばアメリカの使命にせよ、エレミアの嘆きの中での信仰衰退にせよ、社会の秩序と自由にせよ、主題それ自体に斬新さがあるというよりむしろ、その提示の仕方やバリエーションの加え方に説教者の独創性と知性が表れた文書と言えよう。

(本稿は1993年9月25日九州アメリカ文学会の例会において、「ピューリタニズムにおける説教と形式」という論題で発表した草稿を基礎とし、加筆したものである。要約は「ピューリタニズムにおける「使命」—ダンフォース『荒野への使命』の説教を中心に—」『詩と散文』第57号に掲載されている。)